

**理学部**

I	研究水準	.....	研究 5-2
II	質の向上度	.....	研究 5-3

## I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度の教員一名当たりの平均論文数は約 3 件である。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択数が年平均 80 件であり、学術創成研究・特定領域研究・基盤研究（A）等の大型研究費補助金を獲得している。その他の競争的外部資金の受入状況も良好で、活発な研究活動が展開されていることなどは、相応な成果である。

以上の点について、理学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、理学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

### 2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、数学・物理・化学・生物・地学の各分野において先端的な研究成果が数多く生まれている。卓越した研究成果として、物理学分野における多孔性配位高分子の構造と吸着に関する研究、化学分野における過冷却条件下における水の構造と相転移についての理論的研究、生物学分野における光合成過程でのエネルギー分配に関わる分子機構の研究等が生まれている。また、ダイヤモンド超伝導体の構造解明、超伝導性を示す有機物質の発見、カーボンナノチューブ内の水の構造の解析等の優れた研究成果が生まれ、世界的な研究拠点になりつつある。また、新聞等で報道された研

究成果も多く、過去4年間に国内学会賞等8件を受賞している。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、理学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、理学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が1件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が2件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。